

生活環境や養育者のライフスタイルが 子どもの発達に与える影響(第三報) —養育者の「リテラシー」確立の重要性—

Influence of child development in one's living Environment
and life style of one's parents, nurses and teachers (Part 3)

—An attempt at support with getting “Literacy”
of children's parents, nurses and teachers—

片岡 輝¹・大澤 力²・三角 同³・平山 祐一郎⁴
花輪 充⁵・是澤 優子¹・吉村 香²

Hikaru KATAOKA, Tsutomu OSAWA, Hitosi MISUMI, Yuichirou HIRAYAMA,
Mituru HANAWA, Yuko KORESAWA and Kaori YOSIMURA

はじめに

昨今、ティーンエイジャーの性向と問題行動をめぐり、少年法の改正といった刑罰強化による抑止効果をねらった対策とともに、それらの要因を彼らの生育史にまで遡って心の教育が必要だとする議論が高まっている。

また一方、幼い子ども達を取り巻く生活環境や養育者のライフスタイルの状況が様々な変調を来している。時として死に至る父母や保育者による乳幼児の虐待、無軌道で自己中心的な大人達による悪質な悪戯や傷害事件などがしばしばマスコミを賑わしている。

さらにはダイオキシン・PCB汚染・遺伝子組み替え食品の使用など、子ども達が心身共に健やかに育つ為には、あまりに困難な社会状況が表面化してきている。

われわれは、このような現代社会の課題に対処するための一助として、子ども達が育つ場と

しての家庭・園・地域社会に関わる学際的研究体制を有する本学研究機関の機能を生かすべきであると考えた。子どもの心身の発達を取り巻く生活環境や親のライフスタイルが子どもにどのような影響を与えているかを実証的に研究し、さらに得られた知識を養育者にフィードバックすることで養育者の様々なリテラシー (literacy) を高め、適切な子育てに生かしてもらうことが本研究の目的である。

1. 研究の手続きと方法

本研究においては、子ども達の生活環境と養育者のライフスタイルに関して以下のような衣・食・住・文化の4領域からアプローチを試みた。

- ① 「衣」環境：子どもの衣服に関する環境を調査し、考察する。
- ② 「食」環境：子どもの食習慣および食に関する環境を調査し、考察する。
- ③ 「住」環境：子どもが生活する住に関する環境を調査し、考察する。
- ④ 「文化」環境：子どもを取り巻く情報環境・映像環境などの文化に関する環境を調査し、考察する。

さらに、情報・映像環境に関しては、得られ

-
- 1 児童文化研究室
 - 2 保育内容研究室
 - 3 児童福祉第一研究室
 - 4 教育心理学研究室
 - 5 生活科学研究所 客員研究員

た結果を養育者にフィードバックし、ディスカッションの場を設けることで、養育者の洞察を深め、情報リテラシーの確立に向けた試みを行ったものである。

なお、本格的な調査に先立ち研究全体をデザインするため、初年度は先行研究などの文献調査と、予備調査として「もみの木保育園（稲城市）」の協力を得て現場を重点的に視察・観察したうえ、園長や保育者へのヒヤリングを行った。

(1) 調査研究のフィールドおよび対象

本研究を実施するに当たり協力願ったフィールドおよび調査対象は、東京都内および近郊の保育園2園と幼稚園2園に関わる保育者、在籍する乳幼児及びその親の方々である。各園の概要については、以下に示す。

① もみの木保育園（東京都稲城市）¹⁾

平成7年開園。園児数115名（0～5歳児）、正規職員数21名（保育士15名）。キリスト教精神に基づく全人教育を実践している。

② 浅川保育園（東京都八王子市）²⁾

昭和28年開園。園児数110名（0～5歳児）、正規職員数19名（保育士15名）。丈夫で逞しい心身と創造性の涵養などを保育目標に掲げ、新しい地域社会のニーズに応えた実践を行っている。

③ みやした幼稚園（埼玉県上尾市）³⁾

昭和54年開園。園児数251名（3～5歳児）、正規職員数13名（幼稚園教諭7名）。知育・徳育・体育の調和を目指し、子どもひとり一人を大切にしたい保育を教育方針としている。

④ 田園調布幼稚園（東京都大田区）⁴⁾

昭和30年開園。園児数90名（3～5歳児）、正規職員数9名（幼稚園教諭7名）。日本キリスト教団田園調布教会附属の園としてキリスト教精神を理念とした幼児教育を実践している。

なお、園児数・教職員数については平成12年5月時点の人数である。

(2) 調査期間および調査方法

① 第一期（平成11年度）

文献研究および上記の予備調査を実施。

② 第二期（平成12年度）

平成12年12月10日から28日の間に調査票を各園に送付。各園において、保護者（親）に配布・記入してもらい、回収のうえ返送してもらった（一部は研究室に直接返送）。

回収数334件、回収率71.1%である。アンケート記入者の性別は、男性7名（2.1%）・女性318名（95.2%）、無回答9名（2.7%）であり、平均年齢37.7歳（SD5.2歳）である。アンケートの対象となった子どもの数は男子179名（53.6%）・女子141名（42.2%）、無回答14名で、平

表1 「文化」環境ヒアリング調査の日程と内容（平成13年度）

調査月日	調 査 園	調 査 内 容	調査対象および人数	
10月13日	浅川 保育園	VTR(キューティーハニー)	親11名	保育者9名
10月16日	みやした幼稚園	VTR(キューティーハニー)	親11名	保育者9名
10月23日	もみの木保育園	新聞記事(虐待といじめ)	親9名	保育者5名
11月13日	田園調布幼稚園	新聞記事(虐待といじめ)	親16名	保育者4名

(注1) 平成13年度新聞記事使用：

「虐待といじめ：迷走する男たち児童虐待第三部：優しい体罰はOK」

(注2) 東京家政大学研究科児童学専攻：池田美佳の修士論文「映像情報のリテラシーについての比較研究」に使用したVTRからマナーの欠如や暴力性といった問題を含む場面を再編集したもの。

「リテラシーについての比較研究」に使用したVTRからマナーの欠如や暴力性といった問題を含む場面を再編集したもの

均年齢5.2歳(SD1.3歳)となった。

③ 第三期(平成13年度)

子どもの親と共に、乳幼児期の子どもの大きな影響を与える園の保育者の考え方や価値観の違いを探る目的でアンケートを実施した。アンケートは、第二期で使用したアンケート項目のうち、主に文化環境に関わる部分をそのまま用いて作成した(一部、テレビの暴力シーンに関する質問項目と、現代社会で問題になっている虐待に関する項目の2項目を追加)。

平成13年9月19日～11月13日にアンケートを各園に配布。在籍する子ども(0歳～6歳)の親と園の保育者に記入してもらった上、前年度と同様の方法で回収した。回収数339件、回収率72.1%であった。

さらに親や保育者が新しい情報に触れることで、どう価値観や意見を変容させるかを調査する為に、日を改めてのディスカッションに参加してくれる人を募った。今回は情報として、虐待に関する新聞記事(注1)とキューティーハニーのアニメーション(注2)を使用した(表1)。

2. 結果および考察

(1) 子どもの「住」環境と、その周辺状況

1) 住宅事情と親の職業

アンケート記入者の多くの世帯は核家族であり、子どもは1人(98.8%)～2人(76.3%)という家庭がほとんどである。子どもの性別は半々で、約10人に1人(9.3%)が父方祖母と同居している。父方祖母の平均年齢は66.6歳(SD6.4

表2 同居してる家族の状況

続柄	父	母	第一子	第二子	第三子	第四子	祖父 (父方)	祖母 (父方)	祖父 (母方)	祖母 (母方)	おじ おば	その他	無答
人数(名)	325	328	330	255	50	2	21	31	17	25	6	5	1
割合(%)	97	98	98.8	76.3	15	0.6	6.3	9.3	5.1	7.5	1.8	1.5	0.3

表3 現在の住居形態

()…%

年齢層 住居形態	自 宅 一軒家	自 宅 マンション	借 家 一軒家	借 家 マンション	借 家 アパート	その他	無答	計
30歳未満	2(16.7)	1(8.3)	1(8.3)	3(25)	3(25)	2(16.7)	0(0)	12(100)
30～35	28(35.4)	11(13.9)	6(7.6)	14(17.7)	12(15.2)	8(10.1)	0(0)	79(100)
35～40	68(51.5)	29(22)	6(4.5)	16(12.1)	9(6.8)	4(3)	0(0)	132(100)
40～45	45(48.4)	18(19.4)	6(6.5)	15(16.1)	5(5.4)	4(4.3)	0(0)	93(100)
45歳以上	7(38.9)	7(38.9)	1(5.6)	1(5.6)	1(5.6)	1(5.6)	0(0)	18(100)
計	150(44.9)	66(19.8)	20(6)	49(14.7)	30(9)	19(5.7)	0(0)	334(100)

表4 3年間での養育者の転職の有無(父)

()…%

年齢層・転職回数	0回	1～2回	3～5回	無答	計
30歳未満	7(58.3)	3(25)	0(0)	2(16.7)	12(100)
30～35	64(81)	8(10.1)	0(0)	7(8.9)	79(100)
35～40	115(87.1)	11(8.3)	1(0.8)	5(3.8)	132(100)
40～45	75(80.6)	8(8.6)	0(0)	10(10.8)	93(100)
45歳以上	11(61.1)	4(22.2)	0(0)	3(16.7)	18(100)
計	272(81.4)	24(7.2)	1(0.3)	27(8.1)	334(100)

歳)である。次いで母方祖母(平均年齢63.6歳:SD7.1歳)との同居が7.5%となっている。

住居の形態は、自宅の一軒家が44.9%、次いで自宅マンション19.8%、借家マンション14.7%と続く。自宅・借家の視点で見ると64.7%が自宅、29.7%が借家となっている。年齢別では35歳以上になると自宅の比率が高くなる。反面、借家アパートは30歳未満に多い。これは経済力を反映した数値と思われる(表3)。

父親の職業は、常勤の勤め人が85.5%と圧倒的に多く、自営(自宅・他所)11.4%でそれに続く。ここ3年の転職経験を持たない人が81.5%である(1～2回が10.2%)。一方、母親は約半数(52.1%)が就学中を含めて働いていない。常勤の勤め人は17.4%、パートが16.2%となっている。転職経験のない人は68%で仕事を持つ母親は父親に比較して転職を多く経験している(表4)。

最近3年間での転居の有無については、1回

も無いが66.5%、1～2回は31.4%となっている。なお、年齢が上がるほど転居の減る傾向が認められる。

2) 近隣の状況と、親の友達付き合い

近隣との関係で、近所付き合いが盛んであるとした人は44.3%で半数弱であるが、自分自身が近所の人と親しく付き合っている人は37.1%と少ない。ただし、それを補う形で子どもを預け合う親しい家庭を個別に持つ人が半数(50.3%)いる(表5)。挨拶をする程度の人61.7%である。

近所に同年齢の子どもの多いか否かについては、61.4%が「多い(はい)」と回答している。しかし、一緒に遊んでくれる年上の子の存在は「存在する(はい)」が46.4%で半数を若干割り込んでいる。

【因みに子どもが遊びたがる相手の1位は同年齢の子ども(34.7%)、2位が父親(11.7%)、3位が母親(9.3%)となっている。遊びの内容は

表5 子どもを預け合う親しい家族の存在

()…%

年齢層\存在	はい(いる)	いいえ(いない)	無答	計
30歳未満	3(25)	7(58.3)	2(16.7)	12(100)
30～35	41(51.9)	38(48.1)	0(0)	79(100)
35～40	67(50.8)	64(48.5)	1(0.8)	132(100)
40～45	49(52.7)	43(46.2)	1(1.1)	93(100)
45歳以上	8(44.4)	10(55.6)	0(0)	18(100)
計	168(50.3)	162(48.5)	4(1.2)	334(100)

表6 一週間の家族全員で食事をした回数

食事回数	0	1	2	3	4	5	6	7	8～10	11～14	15～	無答	計
該当数	9	24	64	29	30	32	23	37	42	25	18	1	334
割合(%)	2.7	7.2	19.2	8.7	9	9.6	6.9	11.1	12.6	7.5	5.4	0.3	100

表7 親の好きな食品・嫌いな食品(複数回答)

	食品名	卵	肉類	魚類	乳製品	大豆品	野菜	海草	芋類	果物	飲み物	スナック菓子	レトルト・即席	無答	回答者数
好きな食品	該当数	239	258	268	227	228	281	237	226	263	270	135	96	2	334
	割合(%)	72	77	80.2	68	68.3	84.1	71	68	79	80.8	40.4	28.7	0.6	100
嫌いな食品	該当数	6	18	18	22	18	4	7	15	7	9	53	74	172	334
	割合(%)	1.8	5.4	5.4	6.6	5.4	1.2	2.1	4.5	2.1	2.7	15.9	22.2	51.5	100

ブランコ、滑り台など固定遊具による身体遊び(70.7%)、積み木やブロック(61.7%)、カードゲーム(49.1%)、ままごと(47.3%)、砂遊び(45.2%)などとなっている。】

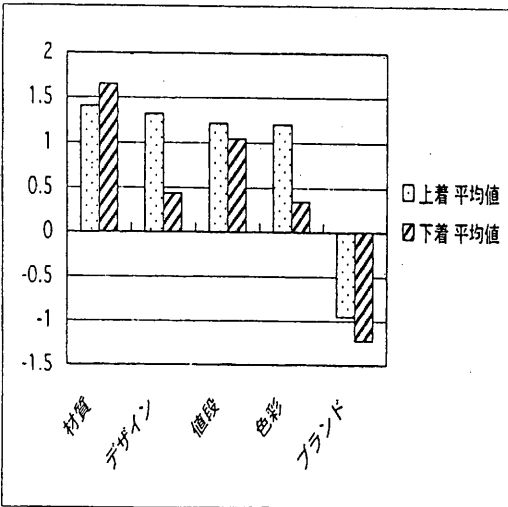
以上、予測していたよりは近所付き合いがあり、相互に助け合っていると見ることもできるが、調査地区に山の手地区以外を含む数値としては、やはり以前より近隣同士の繋がりがうすくなっているという印象を受ける。

(2) 子どもの「衣」環境

(親が子どものために買う衣類)

子どもの衣類を購入する際に親が重視する点は、上着・下着とも材質である。上着ではデザインや色なども重視されるが、下着ではそれら

	上着 平均値	下着 平均値	上着 標準偏差	下着 標準偏差
材質	1.4	1.65	0.75	0.62
デザイン	1.32	0.43	0.73	1.19
値段	1.21	1.04	0.94	1.15
色彩	1.2	0.34	0.76	1.22
ブランド	-0.95	-1.22	1.19	1.07



図表1 子どもの衣類購入(上着・下着)で重視する点はあまり重視されていない。価格については上着・下着ともある程度考慮されている。年齢層でみると、30歳未満は価格を重視し、45歳以上は色やデザインを重視する傾向が認められた。

図表1は、衣類購入の際に重視する事柄それぞれについて「はい(2点)」～「いいえ(-2点)」の5段階で回答してもらい、各平均点を求めてグラフ化したものである。

子どもの衣類の購入先としては、スーパーの利用度が高く(74.0%)、デパート(63.2%)とショッピングモール(39.5%)がそれに続く。

子どもの衣類の枚数調節については、やはり気候や天候が重視され、寒暖に対応して親の感覚で調節されている。以前のように「衣替え」といった形式的習慣は無視される傾向にある。「厚着・薄着」を育児の明確な方針にしている人も少ないようである。この結果は加藤ら(1994)の「乳幼児を育てる環境の設定や衣服の着せ方・寝具の使われ方は、保育者である母親の感覚的な選択に依存する」⁵⁾という指摘に沿うものである。

以上、子どもの衣類に関しての親の配慮や判断を検討してみると、経済性・機能性・耐久性など様々な衣類の持ち合わせるべき基本的要素を賢く判断して対処していることが分かる。ブランドは全くと言ってよいほど考慮されていない。但し、人目に触れることのない下着のデザインや色が軽視される点はやや現実的過ぎる印象も受ける。

(3) 子どもの「食」環境

1) 食事の形態と回数

一家団欒の象徴とも言える家族全員での食事の回数は週平均5.7回(SD4.2回)である。回数別にみると2回が19.2%で最も多いが、1～15回まで10%前後で幅広い分布となっている。この週平均約6回というのは必ずしも少ない数字とは言えない。子ども達は幼稚園や保育園に通っており、昼はお弁当や給食となっている。朝についても、父親は仕事先との関係で出勤時間が様々である。夕食と休日の食事を中心に考えれば、家族の配慮が感じられる回数と言えよう。

反対に1週間の中で子どもが一人で食事を食べた回数は0回が85.0%と圧倒的に少ない。平

表8 子どもの好きな食品・嫌いな食品（複数回答）

	食品名	卵	肉類	魚類	乳製品	大豆品	野菜	海草	芋類	果物	飲み物	スナック菓子	レトルト即席	無答	回答者数
好きな食品	該当数	235	305	262	267	208	151	158	220	274	276	277	153	1	334
	割合 (%)	70	91	78	79.9	62.3	45	47	66	82	82.6	82.9	45.8	0.3	100
嫌いな食品	該当数	28	5	22	23	33	125	49	29	21	15	2	23	119	334
	割合 (%)	8.4	1.5	6.6	6.9	9.9	37	15	8.7	6.3	4.5	0.6	6.9	35.6	100

表9 子どもの食事態度に関するしつけ ()…%

事 項	は い	いいえ	無答
朝食必ずとる	325(97.3)	8(2.4)	1(0.3)
間食規則的	198(59.3)	133(39.8)	3(0.9)
食事時間定期	289(86.5)	43(12.9)	2(0.6)
食事前後の挨拶	305(91.3)	27(8.1)	2(0.6)
偏食に注意	293(87.7)	40(12)	1(0.3)
道具の指導	301(90.1)	32(9.6)	1(0.3)
立ち歩き禁止	314(94)	19(5.7)	1(0.3)
カロリー注意	114(34.1)	219(65.6)	1(0.3)
着色剤農薬注意	205(61.4)	127(38)	2(0.6)

均回数で言えば0.5回 (SD1.6回) となる。この結果は子どもの年齢が小さい上、就学前の幼児であることから当然のこととも言えよう。学齢児を対象とした調査であれば、結果はかなり異なっていたのではないだろうか。

なお、親が子どもに手作りの食事をさせた回数は、週平均11.6回 (SD5.2回) である。回数ごとの比率を見ると週6～10回 (32.9%) が最も多くなっている。

2) 食品の嗜好

親の好きな食品としては、野菜 (84.1%)、飲み物 (80.8%)、魚類 (80.2%)、果物 (79.0%)、肉類 (77.0%) があげられる。嫌いな食品はレトルト・インスタント食品 (22.2%)、スナック菓子 (15.9%) などであるが、総じて嫌いな食品は少ない。

一方、子どもの側では好きな食品として肉類 (91.3%)、スナック菓子 (82.9%)、ジュース類 (82.6%)、果物 (82.0%)、乳製品 (79.9%)、魚

類 (79.9%)、卵 (70.0%) があげられ、大半が高いパーセントを示している。嫌いな食品は野菜 (37.4%) と海草 (14.7%) が目立つ程度である。

親子の嗜好がどの程度一致するかをみるために「子どもの好きな食品・嫌いな食品」と「親の好きな食品・嫌いな食品」をクロスしてみると、親子での特定の食品に対する好みの一致率が他の食品との一致率 (平均) より高まる傾向が認められる。しかし、パーセントの高さで食品の好みに順位をつけ、ケンドールの相関係数を求めたところ、有意な差は認められなかった。また、子どもでは45.0%と47.0%の選択率になる野菜と海草への好みは親の方ではそれぞれ84.1%・71.0%と高くなるなど、不一致な点も目についた。

なお、食材の購入先としてはスーパーが最も高く (91.3%)、生協 (51.1%)、近所のお店 (33.8%) と続いている。35歳未満の年齢層は

生協よりも近所のお店を利用する傾向があるようだ。

3) 食事の態度とマナー

親は間食の量や時間にあまり留意していないようであるが、他の食事態度については全体として気を使っている。特に留意している事項は「朝食を必ずとること」・「食事前後の挨拶」・「箸や食器の使い方」などである。食事時間を決めていることや偏食をしないことなどにも一定の注意を払っている。

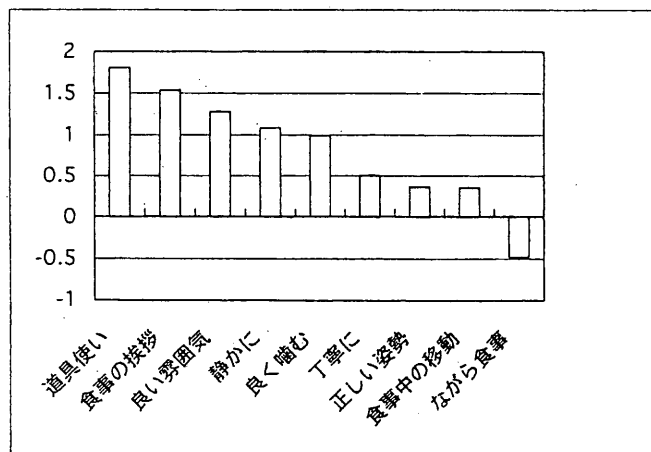
子どもの食事態度についての躾けとしては、朝食を必ず食べさせる(97.3%)、席を立たないようにさせている(94.0%)、食事前後の挨拶(91.3%)、偏食への注意(87.7%)、食事時間を決める(86.5%)などが高い比率となっている。

子どもの側について見ると、「ながら食事」を除けば食事態度は概ね良好である。特に箸やフォークの使用・挨拶・食事中に大声

を上げない等に関しては良い評価を得ている。なお、箸やフォークの使用に関しては年齢が上がるほど評価点(+2~-2の間に設定)の高くなる傾向が認められた。具体的には3歳児以下は平均1.4(SD0.9)、4歳児は平均1.8(SD0.7)、5歳児1.9(SD0.5)、6歳以上1.9(SD0.4)となっている。食事中に大声を出さないことも高年齢ほど高い点となる。挨拶については3歳児以上どの年齢も安定した高得点となっている。

親の食事態度と子どもの食事態度の間には一定の関係があり、双方を得点化してピアソンの相関係数を求めたところ $\gamma = 0.365$ ($P < 0.001$)と有意差が認められた。従って食事態度の良い親の子どもは、食事態度の良くなる傾向がある。このことは親の食事態度の良し悪しが子どもに影響を与えることを示唆していると言える。また、子どもの食事態度についての親の躾けの熱心さが、子ども側の態度の良好さに影響していることが伺えるが、一方で親の禁止にかかわら

事項	平均値	標準偏差
道具使い	1.8	0.61
食事の挨拶	1.53	0.88
良い雰囲気	1.27	0.84
静かに	1.08	1.17
良く噛む	0.99	1.06
丁寧に	0.5	1.19
正しい姿勢	0.36	1.15
食事中の移動	0.35	1.45
ながら食事	-0.48	1.55



図表2 子どもの食事態度

ず、子どもの「ながら食事」や「食べ歩き」を止められないという事態にも注目する必要がある。

(4) 子どもの「文化」環境（情報環境・映像環境）と環境としての「親・保育者の存在」

1) 親および保育者（幼稚園教諭・保育士）のライフスタイルと価値観

ここでは、親と並んで乳幼児期の子どもに接する時間が長く、大きな影響力をもっている保育者の生活習慣や価値観についても触れてみたい。

アンケートの中で親および保育者の趣味や生活習慣として選ばれている項目をパーセントの高いものでみた場合、毎日お風呂に入っている（親90.4%：保育者100%）、音楽を聞くのが好きだ（親76.0%：保育者93.5%）、毎日シャンプーしている（親67.1%：保育者87.0%）。仕事や趣味でコンピューターを使用すると車やバイクの免許を持っているを除けばお風呂、音楽鑑賞、毎日洗髪など、いずれも保育者のパーセントが高くなっている。なお、楽器の演奏は親22.5%：

保育者58.7%となり、上記の差とあわせて保育者における職業の影響がうかがえる数値となっている。

買い物や娯楽に関して親について見れば第二報とさほど大きな変化は認められない。保育者についても全体に健全な印象を受ける。どんなに欲しいものがあったとしても、借金してまでは買わない（親72.8%：保育者76.1%）、安くても質の悪いものは買わない（親66.2%：保育者71.4%）、買い物をする時には本当に必要か考えてから買う（親62.9%：保育者60.9%）などとなっている。

ファッションに気をつけている（親32.3%：保育者43.5%）、衝動買いをする（親29.9%：保育者47.8%）、身の回りのものをブランド品にしている（親2.4%：保育者4.3%）などのパーセントが保育者に高くなる傾向が認められるのは、仕事のストレスを買い物で解消しようとする傾向があるのだろうか。なお、ごく少数ではあるが、主婦のストレス解消はより投機性の強いもの（宝くじ・パチンコ）に向かっている。

表10 養育者の生活・趣味の傾向（複数回答）

下段…%

	コンピュータ	TVゲーム	携帯電話	毎日洗髪	毎日入浴	車免許所持	音楽鑑賞	楽器演奏	無答	回答者数
親	143 42.8	18 5.4	188 56.3	224 67.1	302 90.4	298 89.2	254 76	75 22.5	1 0.3	334
保育者	14 30.4	2 4.3	35 76.1	40 87	46 100	36 78.3	43 93.5	27 58.7	1 2.2	46
計	157 41.3	20 5.3	223 58.7	264 69.5	348 91.6	334 87.9	297 78.2	102 26.8	2 0.5	380

表11 養育者の金銭的価値観（複数回答）

下段…%

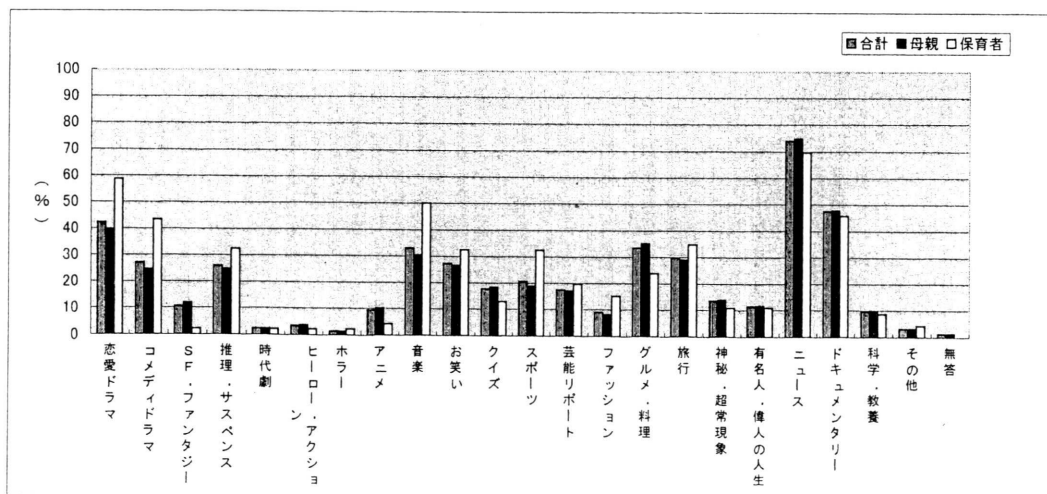
	借金なし	衝動買い 傾向	安価劣悪 品買	必需品の み購入	ブランド 志向	ファッ ション	宝くじ 購入	パチンコ	競馬競輪	無答	回答者数
親	243 72.8	100 29.9	221 66.2	210 62.9	8 2.4	108 32.3	74 22.2	1 0.3	1 0.3	2 0.6	334
保育者	35 76.1	22 47.8	33 71.7	28 60.9	2 4.3	20 43.5	5 10.9	0 0	0 0	1 2.2	46
計	278 73.2	122 32.1	254 66.8	238 62.6	10 2.6	128 33.7	79 20.8	1 0.3	1 0.3	2 0.5	380

表12 養育者の世論への共感度(複数回答)

下段…%

	金 権 主 義	稼 ぐ 大変さ	非金権 主 義	学 歴 主 義	受 験 地 獄	家庭記事 無 関 係	マスコミ 不 信	個々努力で 社会浄化	個人の 非 力	自己行動か ら社会改変	政 治
親	78 23.4	300 89.8	209 62.6	25 7.5	94 28.1	45 13.5	46 13.8	238 71.3	91 27.2	91 27.2	137 41
保育者	1 2.2	41 89.1	35 76.1	3 6.5	14 30.4	7 15.2	5 10.9	40 87	8 17.4	25 54.3	32 69.6
計	79 20.1	341 89.7	244 64.2	28 7.4	108 28.4	52 13.7	51 13.4	278 73.2	99 26.1	116 30.5	169 44.5
	宗 教	戦 争	平 和	オゾン ホール	環境問題	少年犯罪 の 厳 罰	少年犯罪 の 更 正 化	親の子育 て 責 任	子育ての 社会援助	無 答	回答者数
親	26 7.8	92 27.5	166 49.7	111 33.2	241 72.2	202 60.5	82 24.6	252 75.4	251 75.1	2 0.6	334
保育者	9 19.6	29 63	36 78.3	18 39.1	31 67.4	27 58.7	20 43.5	38 82.6	43 93.5	1 2.2	46
計	35 9.2	121 31.8	202 53.2	129 33.9	272 71.6	229 60.3	102 26.8	290 76.3	294 77.4	3 0.8	380

	恋愛ドラマ	コメディドラマ	SF・ファンタジー	推理・サスペンス	時代劇	ヒーロー・アクション	ホラー	アニメ	音楽	お笑い	クイズ	スポーツ	芸能リポート	ファッショ	グルメ・料理	旅行	神秘・超常現象	有名人・偉人の人生	ニュース	ドキュメンタリー	科学・教養	その他	無答
合計	42.2	27.1	10.6	26.0	2.4	3.5	1.5	9.4	33.0	27.4	17.7	20.6	17.4	9.1	33.6	29.8	13.6	11.5	74.0	47.5	9.7	3.2	1.2
母親	39.6	24.6	11.9	24.9	2.4	3.8	1.4	10.2	30.4	26.6	18.4	18.8	17.1	8.2	35.2	29.0	14.0	11.6	74.7	47.8	9.9	3.1	1.4
保育者	58.7	43.5	2.2	32.6	2.2	2.2	2.2	4.3	50.0	32.6	13.0	32.6	19.6	15.2	23.9	34.8	10.9	10.9	69.6	45.7	8.7	4.3	



図表3 養育者が好きなテレビ番組のジャンル(複数回答・%)

次に世論や様々な考えへの共感度について見てみると以下のような結果となっている。お金を稼ぐことは大変なことだ(親89.8%：保育者89.1%)、子育てに社会的援助・協力が必要(親75.1%：保育者93.5%)、子育ては親の責任である(親75.4%：保育者82.6%)などの選択率が高い。その他、環境問題に関心をもつべきである(親72.2%：保育者67.4%)、社会をよくするためにはひとり一人の努力が必要である(親71.3%：保育者87.0%)などが高いパーセントを示している。なお子育てに関して、親も保育者も親の責任と社会の支援という相反する二つの意見がほぼ同率となっており、両者とも大切であると認識されている点は興味深い。

2) その1 テレビの視聴時間と内容

親が1日あたり平均して視聴するテレビやビデオの時間は2.5時間(SD1.7時間)、子どもの場合は平均2.2時間(SD1.1時間)でほとんど差が認められなかった。一方、保育者は1.1時間(SD1.1時間)と約半分の時間である。専業主婦の多い保護者に対して保育者は昼の時間に勤務しており、自由にテレビ視聴が出来ないという事情があるのだと思う。養育者が好きで良く見るテレビ番組のジャンルを上位5位まであげると、親は①ニュース(67.4%)、②恋愛ドラマ(44.6%)、③グルメ・料理番組(40.1%)、④ドキュメンタリー(37.7%)、⑤音楽(37.4%)などである。一方、保育者の方は①ニュース(69.6%)、②恋愛ドラマ(58.7%)、③音楽(50.0%)、④ドキュメンタリー(45.7%)、⑤コメディドラマ(43.5%)となっており、恋愛ドラマや音楽、コメディドラマの比率が高くなっており、グルメ・料理番組の比率が低くなっている。これは保育者の平均年齢の若さとも関係している。(親の平均年齢35.5歳/SD4.1歳：保育者の平均年齢29.7歳/SD6.4歳)

子どもの方は①アニメが96.4%で断然高く、②ヒーロー・アクション(32.9%)、③お笑い(21.6%)、④音楽(17.7%)、⑤クイズ/科学・教養(13.6%)の順になっている。

親が子どもに見せたいと思っている番組は①科学・教養(29.9%)、②アニメ(23.1%)、③ドキュメンタリー(19.5%)、④偉人の人生(12.6%)、⑤ニュースなどであり、見せたくないものは①ホラー(48.8%)、②レポート(15.9%)、③推理サスペンス(15.0%)などとなっている。(以下は10%未満)

ちなみに、「子どもが良く見る番組」と「親の良く見る番組」の順位相関(全ての番組の相関)：「子どもに見せたい番組」と「子どもが良く見る番組」の順位相関：「子どもに見せたくない番組」と「子どもが良く見る番組」順位相関について計算してみると、「子どもに見せたい番組」と「子どもが良く見る番組」の間には、統計上有意な相関が認められる。このことから、特定の番組を見せたいとする親の意識的な関わりは子どもに影響を与えていると考えられる。

なお、保育者が子どもに見せたいと思っているテレビ番組は、①アニメ(47.8%)、②科学・教養(30.4%)、③スポーツ(21.7%)、④SFファンタジー(19.6%)、⑤ヒーロー・アクション(15.2%)である。

見せたくないものは、ホラー(39.1%)が高い他、推理サスペンス(15.2%)、ヒーロー・アクション(10.9%)が2桁台である。ヒーロー・アクションは保育者の場合、評価の分かれる傾向が認められる。

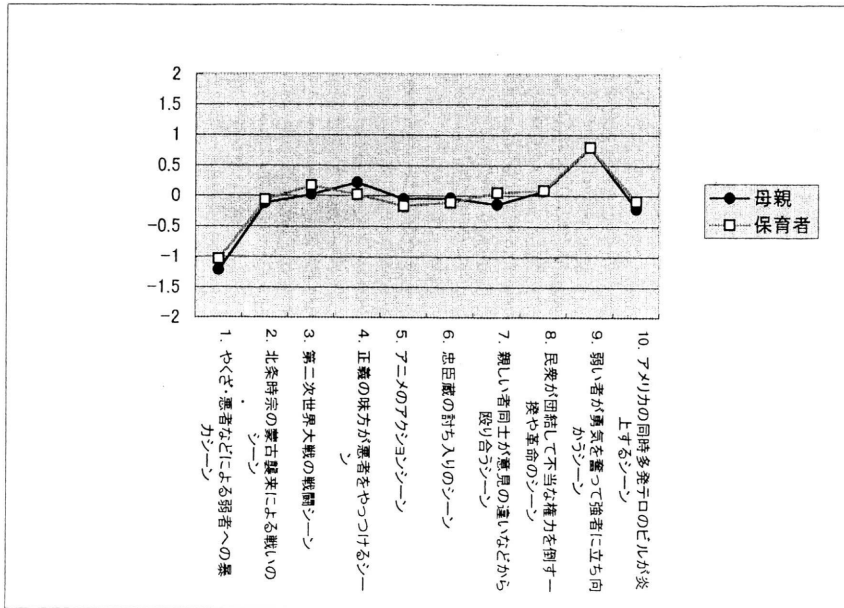
2) その2 テレビの暴力シーンやアクションシーンへの考え

今年度あらたに調査票に加えられた設問にテレビの暴力シーン、活劇シーン、アクションシーンを子どもに見せたいか否かを問うものがある(テレビで見られる様々な暴力シーンに関して、子どもに「見せたい度合い」「見せたくない度合い」を、見せたい(+2)～見せたくない(-2)の5段階評価で質問してみた)。

図表4に見るように最も見せたいとされたものは「弱い者が勇気を奮って強者に立ち向かうシーン」であり、親・保育者とも平均点+0.8となっている。「どちらかと言えば見せたい」に

生活環境や養育者のライフスタイルが子どもの発達に与える影響(第三報)

	1. やくざ・悪者などによる弱者への暴カシーン	2. 北条時宗の蒙古襲来による戦いのシーン	3. 第二次世界大戦の戦いシーン	4. 正義の味方が悪者をやっつけるシーン	5. アニメのアクションシーン	6. 忠臣蔵の討ち入りのシーン	7. 親しい者同士が殴り合うシーン	8. 民衆が団結して不当な権力を倒す一揆や革命のシーン	9. 弱い者が立ち向かって強い者に勇気を奮起するシーン	10. アメカの同時多発テロのビルが炎上するシーン
母親	-1.22	-0.12	0.02	0.22	-0.05	-0.04	-0.14	0.08	0.80	-0.21
保育者	-1.04	-0.07	0.17	0.02	-0.17	-0.11	0.05	0.09	0.80	-0.09



図表4 テレビの各シーンを見せたくない度合い(平均値)

表13 ビデオ視聴前後の変化と両者の差の平均 N=45

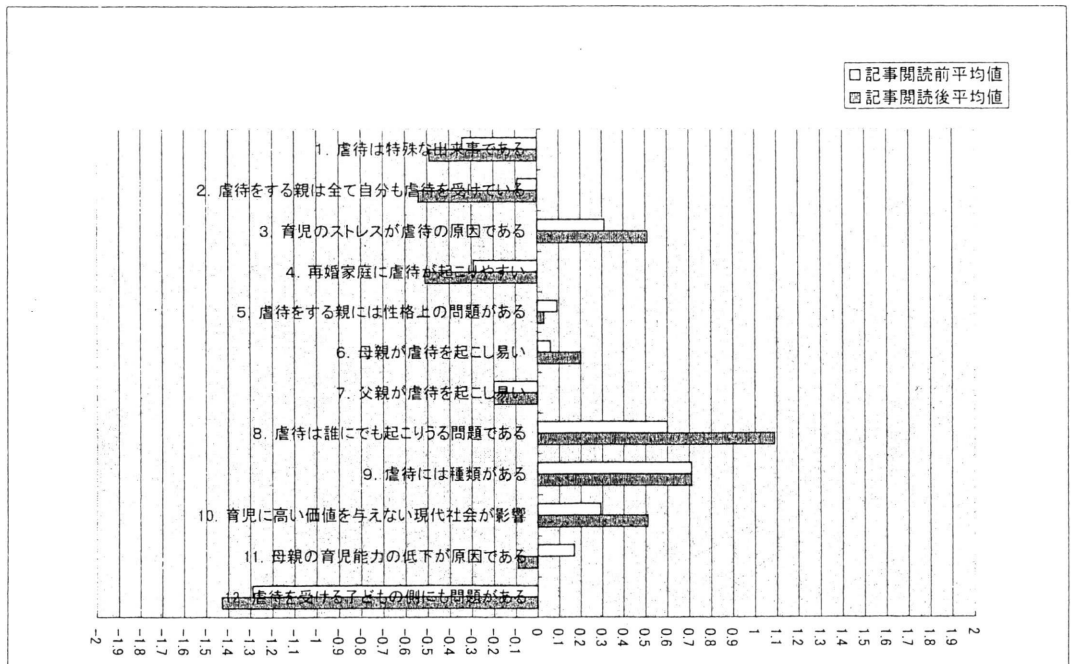
	視聴前		視聴後		両者の差の平均	
	平均	SD	平均	SD	差	SD
1	-1.2	0.8	-1	0.8	0.2	1
2	-0.1	0.2	-0.3	0.7	-0.2	1
3	0.1	0.7	0	0.8	-0.1	0.9
4	0.5	0.7	0.1	0.7	-0.4	0.7
5	0	0.5	-0.2	0.7	-0.2	0.7
6	0.1	0.5	0	0.5	-0.1	0.4
7	0	0.9	0.1	0.7	0.1	0.7
8	0.3	0.8	0.1	0.7	-0.2	0.9
9	0.8	0.8	0.5	0.7	-0.3	0.6
10	-0.2	0.9	0	0.8	0.2	0.9

相当する。一方、最も見せたくないシーンは「やくざ・悪者などによる弱者への暴力シーン」で、親は平均 -1.2 、保育者は平均 -1.0 となっている。「どちらかと言えば見せたくない」に相

当する。正義の味方が悪者をやっつけるシーンなどもそれほど見せたいとされない（親 0.2 ：保育者 0.0 ）。親と保育者の間には大きな違いは見られず、全体に $+0.5 \sim -0.5$ の範囲内で納まっ

表14 新聞記事を読覧後の変化とディスカッション後の変化

	親 (N=98)			保育者 (N=22)		
	読覧前	読覧後	ディスカッション	読覧前	読覧後	ディスカッション
1	-0.5	-0.6	0.5	-0.4	-0.5	-0.3
2	0.2	-0.2	-0.5	0.1	0.1	-0.8
3	0.6	0.4	0.5	0.6	0.3	0.6
4	-0.4	0.4	-0.5	-0.1	-0.2	-0.4
5	0.1	0	0	0.3	0.3	0
6	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3
7	-0.1	0	-0.3	-0.1	0.1	0.1
8	0.8	0.8	1.2	0.7	0.6	0.8
9	0.7	0.8	0.7	1.1	1	0.9
10	0.3	0.3	0.4	0.4	0.7	0.8
11	0.1	0	0	0.5	0.6	-0.2
12	-1.4	-1.4	-1.4	-1.4	-1.4	-1.7



図表5 親と保育者の「虐待」に関する意識程度

ている。分からないとか、判断に迷うということであろうか。

後日、再調査に協力してもらえた親28名、保育者17名、計45名に「キューティーハニー」のビデオ(約4分間)を見てもらった。内容は、正義の男が悪者を徹底的にやっつけるシーンがやや過激に描かれている。ビデオを見たあとで再度同じ質問事項に記入してもらったが、結果は表13の通りである。

僅かであるが、全体に子どもに見せたくない方に変化している。特に正義の味方が悪者をやっつけるシーンや弱い者が勇気をもって強者に立ち向かうシーンでその傾向が見られる。暴力全体に対して若干否定的になったようであり、ビデオの影響は否定できない。

3) その1 養育者と情報・ニュース

養育者が情報やニュースを入手するルートはテレビ(親97.6%:保育者95.7%)と新聞(親82.9%:保育者89.1%)が圧倒的に多い。折込チラシは親38.0%に比して保育者8.7%と雑誌(保育者28.3%)よりも低くなっている。口コミ(親36.5%:保育者21.7%)がそれに次ぐが、最近ではインターネットなども伸びる傾向にある。

養育者が興味をもつ出来事としては、いじめ(親83.2%:保育者82.6%)、幼児の被虐待(親74.0%:保育者89.1%)、子どもがすぐキレル事件(親74.0%:保育者84.8%)、10代の非行(親68.9%:保育者50.0%)、親が幼児を放置して死なせた事件(親53.6%:保育者71.7%)、学級崩壊(親52.1%:保育者63.0%)などであり、全体に保育者の意識の高さが感じられる結果となった。

3) その2 虐待についての見方

やはり今年度追加した設問である。親と保育者に虐待についての各項目に関して+2(全くそう思う)～-2(全くそう思わない)の5段階で評価してもらった。(表3)

「虐待」の問題に関しては、親も保育者も全体として似たような考えをもっている。「虐待

は特殊な出来事」ではない、「育児のストレスが虐待の原因である」「虐待は誰にでも起こりうる問題である」「虐待には種類がある(保育者は専門職としてより正確な知識をもっているようだ)」「虐待を受ける子どもの側にも問題がある」とは思えないなど(子どもの側にもしばしば問題行動が見られることはあまり知られていない)。また、保育者の側には母親の育児能力の低下が原因とすることを肯定する傾向が見られる。

ところで、最初に質問事項に記入した後で「虐待といじめ」に関する新聞記事を読んでもらい、再度同一項目の質問に記入してもらった結果が表14である。

表に見るように、新聞記事を閲覧後に育児のストレスを虐待の原因と考えることが親・保育者とも減少する傾向が見られる。また、保育者にあっては育児に価値を与えない現代社会のあり方を原因の一つとする見方が強まっている(ディスカッション後はさらに強まる)。

次に、後日再調査に協力することを申し出てくれた35名(26名の親と9名の保育者)に日を改めて新聞記事についてのディスカッションをしてもらった後で再び同一質問への記入を願った。その結果も表14に重ねて記載する。

親の方では虐待は誰にでも起こりうるとの見方を強めるが、保育者の方ではそれほどでもない。また、虐待する親は自分も過去に虐待を受けたとする考えは、親・保育者とも減少している。

3. 総合考察

関東圏における調査であるが、現代の養育者(親と保育者)のライフスタイルと、それが子ども達に与える影響の一端を知ることが出来た。

(1) 子どもの「衣」環境

子どもの衣類に関しては、親の堅実な生活感覚を伺うことが出来た。ブランド品への指向はなく、価格を考慮しながら品質に関心を払って

いる。但し、下着について恐らく人目につかないということで色やデザインが重視されないのは、やや現実的過ぎる印象も受ける。

子どもの衣類の枚数調節は天候や気候に合わせて行われ、衣替えといった季節の行事は軽視される傾向にある。この結果は、加藤ら(1994)の調査結果と一致する。

(2) 子どもの「食」環境

一家団欒の象徴ともいえる家族全員での食事が週平均6回というのは現代社会では必ずしも少ない数字とは言えない。子ども達は幼稚園や保育園に通っており、昼はお弁当や給食となっている。朝についても仕事を持つ多くの親は出勤時間との関係で一緒に食事が出来ない。夕食を中心に考えれば家族の配慮が感じられる回数と言えよう。

親が子どもに手作りの食事をさせた一週間当たりの平均回数は12回ほどである。子どもの食事中の態度は親の食事態度の影響を受けているようであり、望ましい養育者の食事態度が子どもの態度を望ましいものになっている。また、親は一般に食事中の態度に関する簇にも熱心である。

なお、食品への好みは親子で必ずしも一致していないことが分かった。

(3) 子どもの「住」環境

今回、調査対象とした4園が置かれた地域は山の手地区、郊外地区など様々である。従って全体としては現在の平均的状況が把握できたのではないのかと思われる。

近隣の状況に関しては、近所付き合いが盛んとみる人はほぼ半数弱であるが、自分自身が親しい付き合いをしているという人は37%と少ない。但し、それを補う形で子どもを預け合う親しい家族を個別にもつ人が半数いる。このような状況は転居の率も関係しているのではあるまいか。過去3年間の転居が30%程度あることも地域の人々との交流を不十分なものになっている

ように思われる。近所の子どもの関係についてみれば、子どもが遊びたい相手として1位となる同年齢の子が比較的多くいる。一方、年上の子がやや少ないこと、また年上・年下の遊びがそれほど興味深いものとなっていないのは、子ども同士の自主的集団が形成されにくい現代の子ども状況を反映しているのではないかとと思われる。住宅と同居家族に関して言えば65%が持ち家である。年齢の若い層に相対的に借家が多いことは経済力の問題からいって当然の現象と思われる。また、若い層の転居率が高いことも自宅をもつことに慎重になっているのではあるまいか。

同居家族については、核家族が圧倒的に多い。さらに半数の母親が仕事についていないことから「母子カプセル」と呼ばれる状況が生じやすく、子どもの虐待を産む素地となっている。その一方、3世帯家族の場合について見てみると、母親にとっては夫方祖母との同居ということであり、やはり気を許せる人間関係とはなりにくい問題があるように思う。

(4) 子どもの「文化」環境

子どもの文化環境は多くの部分で養育者の文化環境と重なり合っているが、その中核をなすものは映像環境・情報環境と言ってよい。

親や保育者(保育士・幼稚園教諭)がニュースや様々な情報を入手するルートは大半がテレビと新聞である。

テレビやビデオの視聴についてみると、親と子どもの視聴時間はともに1日当たり2～2.5時間であるが、これに対し保育者の視聴時間はほぼ半分の1時間程度である。昼間は勤務の関係でテレビを自由に見られないためと思われる。番組の内容は、親の場合ニュース、恋愛ドラマ、グルメ・料理番組といったものが上位にあり、保育者の方でもニュース、恋愛ドラマは共通して上位にあるが、3位は音楽になっている。

家族で親が視聴するテレビ番組は子どもの発達や人格形成に影響を与えていると見られるが、

少なくとも親が見せたいと思って子どもに視聴を勧めている番組(特にアニメや科学・教養番組)については子どもの側が明らかに親の意向に沿うものを視聴する傾向が認められる(統計的に有意な相関がある)。

ところで今回、親と保育者に「子どもの虐待(被虐待)」についての質問を行い、回答を得た。回答には専門家の視点で見て正確な部分、マスコミ情報を鵜呑みにしていると思われる部分、自分自身の考えなどが錯綜しているが、関連する新聞記事を読んでもらい、ディスカッションの場を設けたところ、若干ではあるが、虐待への見方に変化が生じた。

またアニメの過激な暴力場面を見た親や保育者が暴力全体に対して否定的になるなど、日常接する情報・映像の重要性が伺われた。

適切な子育てを目指す養育者にとって正しい育児情報をしっかり身につけることが重要であることを思うと、養育者の情報リテラシーの確立が是非望まれるところである。

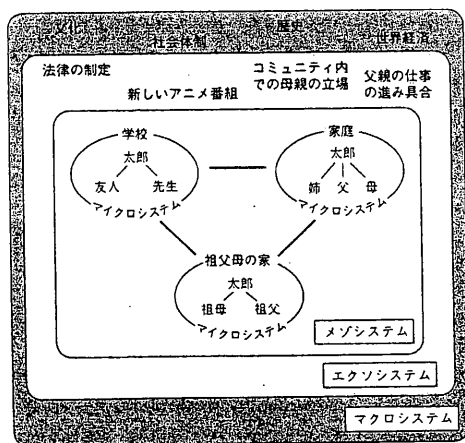


図 1-3 生態学的环境の構造。発達に影響する生態学的环境は、人々に直接作用している場面よりもずっと広い範囲に及んでいる。図はブロンフェン布伦ナーによって提案された四つの水準を示している。なお、図では理解しやすいように、小学生を対象として解説を加えている。もちろん、あらゆる年齢層の発達にこの考え方は当てはまる。

図表 6 ブロンフェン布伦ナー(1979)の4つの階層システム⁶⁾
＜生態学的环境の構造＞

以上、衣・食・住・文化に関わる環境や、親・保育者のライフスタイルが直接、間接に子どもの発達に影響を与えることについて述べてきたが、ブロンフェン布伦ナー(1979)は子どもの発達への影響を① マイクロシステム、② エクソシステム、③ メゾシステム、④ マクロシステムという4つの階層システムで捉えている⁶⁾(図表6)。そのような視点で言えばわれわれの調査は「家族というマイクロシステム」、「保育園・幼稚園というマイクロシステム」にアプローチしたわけである。今後、両者の相互作用とも言うべきエクソシステムないし、それ以上の領域にも研究を進めていきたいと考えている。

引用文献

- 1) もみの木保育園：入園のしおり，(2000)
- 2) 浅川保育園：平成12年度入園・進級のしおり，(2000)
- 3) 田園調布幼稚園：入園のしおり，(2000)
- 4) みやした幼稚園：入園のしおり，(2000)
- 5) 加藤佐枝子・池田麻子・富田純子・都築和代・飯塚幸子：乳幼児の生活環境及び衣服に関する調査研究．東京，実践女子大学家政学部紀要，第31号，p. 71，(1994)
- 6) 山本利和：現代心理学シリーズ7，培風館，p. 97，(1999)